

立教大学観光学部・観光学研究科開設20周年記念鼎談 観光学部・観光学研究科開設当時を振り返る

2018年立教大学観光学部および大学院観光学研究科は開設20周年を迎えた。これを記念して、開設当時の初代観光学部長の岡本伸之氏、初代観光学科長の溝尾良隆氏、そして初代観光学研究科専攻主任の前田勇氏の三氏をお招きして鼎談を開催した。橋本俊哉現観光学部長の司会のもと、開設当初の教育理念やカリキュラム編成、観光学部や研究科の思い出話や苦労話、そして今後の課題や展望等について、和やかな雰囲気の中で率直なご意見を交えて興味深いお話を伺うことができた。今回、誌面制約上、全てのご発言を載せることはできないが、その一部を抜粋して掲載させていただく。

鼎談者：岡本 伸之氏（初代観光学部長）
溝尾 良隆氏（初代観光学科長）
前田 勇氏（初代観光学研究科専攻主任）
司会：橋本 俊哉（現観光学部長）

(1) 開設当時の状況

○**司会**：観光学部と大学院観光学研究科は、おかげ様で今年開設20周年を迎えることができました。本日の記念鼎談では、初代観光学部長の岡本伸之先生、初代学科長の溝尾良隆先生、そして初代観光学研究科専攻主任の前田勇先生から、学部・研究科開設までの経緯や開設当初の様子などについてお伺いしたいと思います。

最近の10年を振り返りましても、ちょうど10年前に観光庁が発足し、その後東日本大震災があり、インバウンドが急増するというように、観光をめぐる環境は大きく変わってきています。さらに10年遡った頃の話になりますので、開設当時の経緯を知らない観光学部の教員も増えておりますし、日本の観光の高等教育の歴史という意味でも、当時のことをきちんと記録に残していくこと

は重要と考えての企画です。

それでは、先生方が実際にかかわられた設置準備から、観光学部・観光学研究科の初期の頃のことについて、いろいろとお話をお聞かせください。開設設置段階についてのお話の前に、まずは当時の日本における観光系学部の状況について、前田先生からお伺いしたく存じます。どうぞよろしくお願いします。

○**前田**：ご承知のとおり、立教大学に観光学科が初めて文部省に認可されたのは、今から言うと51年前だったのでした。1967年に観光学科が許可されたのですが、その後日本で2番目の観光系学科ができるまでには8年かかっているのです。ご存知のとおり、それは横浜商科大学ですが、これは実は「貿易・観光学科」という名称でして、観光の専門家がまだ少なかった時代なので貿易の先生を多くするなど、苦労があったようです。そ

れから、なんと16年間、設置されなかったのです。

立教ができてから24年後になってやっと3番目の学科ができたということです。ところが、それからあと、わりに早く、毎年1校ずつくらいできるようになります。94年まで1校ずつできまして、5校あったのです。ですから、94年の時点で立教を含めて6つありました。そういうところで、岡本先生に、こういう傾向だから、これだけの実績を踏まえて立教大学の観光学科を学部にしようじゃないかという話をしたんです。

そのあと、立教が観光学部の設置を申請している最中に認可された学科が2つありまして、96年に開設された大学、それから97年、だから立教のできる前の年に1つということで2つできています。立教に観光学部ができるときには全部合わせて8校あったという状況でした。しかし、その後、急増するようになります。そのことについてはまた後ほど触れたいと思います。

○溝尾：前田先生、ちょっと補うと、結局、1987年にリゾート法ができたわけ。だから、大学に多くの観光系の学科や学部ができたのもそういう動きの中だから、リゾート法がひとつきっかけだと思う。その次がインバウンドになるわけです。

○司会：そうした状況の中で、1998年の開設に向けて準備を進めてこられたこととなりますが、文科省、いや当時は文部省でしたね、文部省への日本で初めての観光学部の申請について、その当時の話を岡本先生から、お話をしていただけだと思います。

○岡本：確かに、最初かかわったということは事実ですけれども、前田先生が非常に克明に申請当時のいきさつを記録しておられたということで、大変感銘を受けました。確かに前田先生がおっしゃるような形で、立教としては精いっぱい頑張って努力したということですね。

○前田：岡本先生は今でも覚えていらっしゃるかと思います。書類を持って文部省に行き、控え室から呼ばれた時の印象はいかがでしたか。

○岡本：そうですね。あまりよくわからなかったですよ。非常に、いろいろなことを言われましたね。

○前田：私はちょっと違う視点からでしたけれど

も、行ったときに、たくさんの大学が待っていて、それで順番に呼ばれて行くんですが、立教は観光学部を申請したいということを伝えたときには、担当官はとくに意外な表情ではなかったのです。立教もここまで来ましたか、というくらいの、三十何年目ですけれども、非常にそういう点ではほっとしたことを憶えています。

つまり、先ほど言ったように、ほかにもう10校ぐらい観光学科ができたわけでしょう。その上にもう1段上にここでグレードアップしたいのですと申したときに、「ごもっともですね」というような好意的な受けとめ方をしてくれました。

○溝尾：私が、今、立教大学が観光学部をつくらなかったら、ほかの大学が学部をつくる、立教はいつも先頭に立たないだめなんだということを、どこかで話した記憶があります。それで、案の定、1年後にどこかで学部ができたでしょう。

○前田：そうですね。一番早くできたのは札幌です。札幌国際大学。だけれども、これは立教ができたからですね。

○溝尾：1年後に他でできた、最初でよかった。

○前田：確かに、そういう意味で立教が先頭を切るんだから、結果的に言うといいタイミングだったと思います。98年開設ですので、96年ぐらいから申請・折衝していたわけですから、よい時期だったのだと思います。

○司会：文部省に行ったとき、観光学部を申請するという点に関しての指摘であったり、注文であったり、何かそのあたりはどんな感じだったでしょうか。

○前田：私はやっぱり一番意外だったのは、30年前に最初の観光学科を申請したときに学科の名前でさんざん言われたのに、それから30年近くたったなら、「学部は当然でしょう」「立教さんつくるのは当然でしょう」と言われるようになった。世の中変わったなと思いました。

文部省側は申請を待っていたとは言いませんでしたが、それに近い雰囲気でした。

○司会：社会学部観光学科を申請されたときと比較してという話ですね。

○前田：そうそう、そういうことです。びっくりしました。最初のときには「えっ！ 観光の学

科？」なんて言われたんですから。随分時間もたったし、たくさんの学科が実際にできていたのですが、観光学部に昇格・グレードアップしたいということに対して、「えーっ」といった反応は全くありませんでしたから、随分変わったなと思いました。

○司会：そうしますと、90年代に他大で観光関連学科が次々とできてゆく中で、立教大学で観光学科が学部になるというような機が熟していたという感じだったということでしょうか。

○前田：そうですね。

○岡本：国際連合が1967年を特別な年にするということを決めたことがありましたよね。それを記念する本なんかも出ました。それがあって立教の観光学科ができた。

○司会：国連の国際観光年ですね。

○岡本：それで学科をつくって、その延長線上で学部もやろうというふうにあの当時考えたんですね。

○前田：そうですね。それはそういうような社会全体として、日本も観光に関する大学の学部を持たなきゃならないっていうのは非常に強かったですよ、それは。もうさんざんにそのことは言われたわけで、ほかの国ではどうなっているかということで、岡本さん中心になって一生懸命資料作ったのはそのためでした。

○司会：ところで、溝尾先生は観光学部が出来た時、初代の学科長でしたけれども、同時に池袋の社会学部観光学科に在籍していた学生への対応もなさっておられました。どのような状況だったのでしょうか。

○溝尾：池袋には社会学部観光学科の2年、3年、4年がまだ在籍していましたから、観光学部の先生方もみんなその学生たちのための授業に池袋へ行きました。社会学部の教授会にも代表として出席していました。

○司会：池袋の社会学部観光学科の学生が卒業するまでということですね。

○溝尾：そうです。観光学部ができる前の社会学部観光学科の時から学科長をやっていたので延べで学科長を7年やったことになります。岡本先生は学部長を4年やりましたね。



岡本 伸之氏（初代観光学部長）

○司会：前田先生は大学院の専攻主任を5年されましたね。

○前田：最初から完成年までの5年間いなければいけないことになっていたので。前期課程2年、後期課程3年で5年必要でした。完成までいなきゃいけないっていう約束だったから特例的に雇用期間も変わりました。

○溝尾：観光学部ができたばかりの頃は、観光学部というけれども観光は学問かって言われました。それに対して私は、何て答えたかという、文学部だって、理学部だって、法学部だって、みんな明治のときに学問的な体系を外国の借り物でつくったじゃないか。確かに観光は学問かと言われると、そうと言えない面もあるんだけど、これから長い時間をかけて、ヨーロッパやアメリカが法学部とか理学部とか文学部をつくったように、これから観光学部はそういう学問の体系を作るんですと反論しました。

○司会：岡本先生、観光学部の設立準備室の段階でいろいろ部長会でやりとりをされて、学内の反応はいかがでしたか。

○岡本：調整に苦労したとか、そのようなことはほとんどなかったよね。要するに、観光学部をつくるってということで、それはもう非常に大きな仕事でしたからね。学内では、観光学部についてはフォローの風が吹いてね、非常に順調にできたというふうに僕は思っています。

○溝尾：観光学部ができる前から、観光学科の競争率は高かったんですね。

○前田：ええ、高いし、もちろん受験生がすごく多いんです。文部省も入学者と卒業生のマーケットがなかったら認めてくれないのです。それについては全く問題なかったです。面白いことに、90年代というのは、今ほど観光って一般の人の話題になっていませんでした。でも観光はそれなりにやっぱり確実に伸びていたと思うのです。大事なことは、インバウンドでなくて、当時はアウトバウンドだったです。社会の関心は、人々がどんどん外国へ行くことに向けられていた時代だったんです。

○司会：1998年に4年制大学で日本で最初に観光学部ができたということに関して、当時の社会的な反響はいかがでしたでしょうか。

○溝尾：観光学部ができたからということで取材が多かったと記憶しています。

○前田：社会学部時代に観光学科があったから「前からありましたよね」という人が結構いたので、「観光学部待っていました」という人は意外に少なかったように思いました。

(2) 大学院

○司会：申請、設置段階のことに関しまして、大学院についてはいかがでしたでしょうか。

○前田：先ほども申し上げましたが、2つのことを皆さんに覚えておいてほしいと思います。立教の観光学部ができたころまでは、大学、観光関係の学部・学科はなかなかできないわけです。立教ができて初めてできたことから、その基準に基づく審査が厳しいわけです。実務系の教員に関しては、実務で業績はあっても研究上の業績のない人は、資格がないということではねられてしまうわけです。昔はすべてそのようだったのです。ところが、それが2001年から変わってゆきます。「規制緩和」という名のもとにも大きく変わりました。学科の名前なども、カタカナ文字でもOK。それ以上に、社会的な経験を持っている人は、その経験で評価するような制度に変わるなど、2000年に入ると大きな規制緩和が起きるのです。立教の観光学部も観光学研究科もその前に開設されたということ覚えておいていただきたいのです。

それから、もう1つは、大学設置基準ということに関する法令は、必要に応じて修正していくという性格のものなのです。それまでなかった「第何条特例」といったものが適用されてくるのです。あとでお話するように、法律そのものにはないが、特例とか、申し合わせというものによって審査するわけです。特に大学院の場合にはいろいろな特例が出てきます。過去には他の大学が経験したことのないような特例適用の対象になるのです。

私は、大学院を社会学研究科応用社会学専攻の中のさらに観光専修っていうのを、何とか独立させて、観光学専攻の大学院にしたいと以前から思っており、岡本先生にそのことを相談していました。観光学部の独立に合わせて、部長会でも議論していただいて、何とか認められそうなところまでいったんです。正式決定ではありませんが方向性としては了解すると、その時点で、私は可能な限りいろいろな資料をつくりました。まず、いつ独立してもいいようにカリキュラムはちゃんと独自のものを持っているということを示す資料。それから、たくさんの方が、外国からも含めて来ていて、それがずっと継続していて、応用社会学専攻の中の受験生の大半は観光専修であるということの実績を示す資料など資料はつくっておりました。そういうものを持って文部省に行くことになりました。文部省が、そんなのはだめですと言われたらそれまでですから、ところが、文部省の方が、意外なことに、「えっ、大学院を独立させる？」というような言い方を全くしなかったのです。持っている資料、いろいろな資料を提示して説明すると、何て言ったかという、「専攻分離」の適用の可能性がありますよ、という聞いたことのなかった言葉だったのです。

専攻分離とは何かと言うと、既に大学院として完成している状態になっているものの中の、ある専門の部分だけを切り離す、これを専攻分離と言って、今まで医学系でやったことがあるんだそうです。説明を聞いて資料を見ると、その適用ができそうですねって言われたんですよ。そのときはもう驚くのを乗り越えて、もしそれができんだったら、本当にもう実現に向かって大きく進むと思いました。

ただし、最後に1つ、すごくきついことを言われました。「観光の大学院博士課程を認めるということは、観光学博士を認めることですから、博士に相当する内容かどうかを十分に審査させていただきます」と当たり前ですけれども言われたのです。これが一番最初の申請に行ったときの衝撃的な出来事でした、もちろんうれしいほうが大きいのですけれども、この時、これは行けそうだという感触が出てきました。

日本の観光教育研究に役立つような大学院にするためには独立性が必要で、それが可能な状態にもうなっているということを説明するのが私の役目となったわけです。

既設の大学院（社会学研究科応用社会学専攻）から観光関係部分をどうやって分けるのかに関する資料や、カリキュラム表などの資料を持って行きました。それによって文部省も理解してくれました。そして、その専攻分離の可能性を具体的にこちらでも検討しますと言われました。ただ、観光学の博士学位を出すことになるんですって言われたことは重かったですね。ただ、それも、実際にはご存知のとおり、すでに博士（社会学博士）を出していますということだったのです。このように博士を出していた実績が非常に大きいのです。実はそのことには背景がありまして、当時、社会学研究科の応用社会学専攻も、文部省から博士を出すように言われており、博士を具体的に誕生させるための研究会を開いてました。業績を点数化するとか、一定の条件を満たしたら中間報告会の開催権があるとか、そういう手続きを細かくつくって実践に結びつけていました。それらがなかったら、もうこの話は最初から全然だめです。博士を出す実績ってというのが、やっぱり専攻分離で認められた最大の要因だと私は考えています。本当にそういう点では、皆さんの協力が非常に大きかったなと思いました。

課題はもう1つありました。実際に博士課程も専攻分離して大学院がやっていけるかということが問題になったときに、当時の一番の問題となっていたのが、社会人対象入学でした。今までの規則では、そのようなことを別途に扱っていなかったのです。大学院設置基準の中の14条というこ



前田 勇氏（初代観光学研究科専攻主任）

ろに特例を設けるんです。つまり、主として社会人を対象として勉学機会を設けるために、社会人を対象として大学院をつくる場合は、別の授業の方法を認めるという特例をつくるのです。規則自体は変えないで、必要に応じたものを付け加えていくことをするのでして、これが14条特例ですが、一番難しいところでした。

具体的には社会人向けにサテライトキャンパスをつくるってということなのですが、これはいずれもまだできて新しいものだったのです。大学院設置基準第14条の特例としての博士課程前期課程における一部授業科目の夜間開講です。その夜間開講するキャンパスを別なところに設けるためにサテライトというまた別な問題が出てくるわけなんです。社会人の勉学機会を与えるためにこういうことをしなさいと審議会で決まったのです。そこで準備室と相談をして、14条特例に合致するか、サテライトをつくるための条件に合致するかというようなことを整えていきました。これはこの観光学研究科が初めてやったので、あとでできた独立大学院もこれを参考しているのです。サテライトの場合は、本部校から行ける距離がどれだけかというのがとても厳しいのです。サテライトへ行くために要する時間の問題とか、授業が終わったあとの食事をできる場所がちゃんと確保されているとか、厳しい条件がたくさんありました。受講形態別履修モデルもつくりました。文部省からは、とにかくフィージビリティを客観性のある形にして持って来るように言われました。

(3) 教育理念・カリキュラム編成

○**司会**：学部に関しまして、観光学部の教育理念やカリキュラム編成についてお話をいただければと思います。岡本先生、いかがでございましょう。

○**岡本**：やっぱり国際交流っていうんでしょうかね。もっとうちの学生を海外に出したいということはずっと思っていました。

○**司会**：確か私の記憶だと、学生が出ていくほうがアウトバウンドだとすると、インバウンドといえますか、観光学部は留学生がかなり多く、立教大学に来ている留学生の半分近くが観光学部だった。学部の初期のころそのようなことを先生がおっしゃっていた記憶があります。溝尾先生、カリキュラムについてはいかがでしたか。

○**溝尾**：昔の話でね。私が立教に来たときに、カリキュラムに対して文句言ったんです。というのは、リゾート法ができましたので、これからいろいろなところに観光学科ができてくる。そのときに立教大学のカリキュラムをみんな参考にせず、だから、そうなったとき手本になるように、専門学校でやるようなことはやめましょう。模範的なカリキュラムをつくりましょうと提案しました。

○**前田**：98年のときにやっていた「ホスピタリティの原点を求めて」という合同授業があったでしょう。あれはとてもよかった。いろいろな視点の違う人たちと一緒に勉強するというのが、非常に立教らしいと思いました。聖路加国際病院の日野原重明先生にも来ていただいたことをすごく懐かしく思います。あのときにもうかなりのお年だったのに、あれから20年以上お元気だったんですね。

○**岡本**：あのときにね、僕は最初の授業だったんですね。「ホスピタリティの原点を求めて」というタイトルで、そして、今お話しになった日野原先生、それから僕がファンだった西洋史学者の木村尚三郎先生。木村先生は来てくれるかどうかわからなかったんですけども、交渉に行ったら喜んで来てくれたんですね。志木まで電車で来てくれてね。そして、鴨川の病院で医者をされている先生も呼んだんですね。そうしたら来てくれて、

病院の話をやってくれてね。そういう話を全部、学生に聞かせただけけれども、最後に、僕は生まれて初めてだね。学生がみんな拍手したんですね。終わったあとね。僕はものすごく感激したけどね。そういう経験もありましたね。今、メディカルツーリズムが話題になっていますけれども、あの病院は今、国際的な認証基準を満たしているんですね。たいしたものだと思います。

○**司会**：「ホスピタリティの原点を求めて」は随分、履修者も多かった記憶があります。

○**前田**：そうですね。特講みたいな形でやりましたので、面白かったです。実際に旅館の女将さんにやってもらったのもありました。それから、JNTOの方にいただいた、実際に外国人がどんな質問を案内所にしに来るのかという話も、とても面白かったですね。そんなような、いろいろなことをやったのがよかったですね。コミュニティ福祉学部と観光が一緒になってやったこともよかった。あの当時は、コミ福とも結構、交流がありましたね。

○**司会**：今後も大きな課題といえますか、進めていかなければいけないところかと思えます。ありがとうございます。カリキュラムの必修科目はどのように選定されたかをお聞かせください。

○**溝尾**：当時岡本先生が選定に関わられました。

○**岡本**：必修科目が多かったという記憶はありませんね。

○**溝尾**：全科目数でゼミが占める割合が多いため、比率的に必修科目が多いように見えるかもしれません。

○**司会**：社会学部から異動された先生方は池袋と新座、両方で授業をなさっていましたね。

○**前田**：私も池袋の全カリで観光を教えてほしいといわれて行ったんですね。全カリの委員会をつくって雑誌を出したり、山の手コンソーシアムの立ち上げにも関わったりしました。

(4) 思い出話・苦労話

○**司会**：初代の学部長、学科長としての思い出話、苦労話等がありましたらお聞かせください。

○**岡本**：忘れがたいことはいっぱいあります。静

岡山のある大学が、海外の大学と提携して学生をどんどん売り込んでいると聞いて、幸せな大学だなと思いましたよ。当時まだ、立教では実現できていなかったの、退職するときそのことがちょっと心残りでした。

そして今はDMOの時代でしょ。DMOというのはご承知のように、Destination Management/Marketing Organizationのことで、今、全国の観光地でどのようなDMOを設立するか、構想するかということで、一生懸命になっているわけですよ。

うちの大学の場合はすでに観光研究所の講座の中で、東徹先生と大社充先生がDMOを教えるコースをご担当されている。このDMOも、今やっぱり話題になっていますし、授業で取り上げる必要があったなと思っています。

○溝尾：観光学科の学生の観光産業への就職率が3分の1で、観光庁は少なくなくて問題だとよく言うでしょう。でも私は観光学科の3分の1でよいと思っています。

2つ理由があって、1つは、企業が入ったらうちで鍛えますから、いい学生を送ってくださいという。立教大学全体で考えてもJTBに就職した学生の中には法学部、経済学出身もいます。つまり企業は観光専門だけを採用するわけじゃない。

もう1つは、アメリカでも韓国でも観光を教える大学ではホテルを持っています。アルゼンチンのとあるホテルで、「おたくのホテルは本当に若い人が優秀ですね」と言ったら、「ブエノスアイレスのホテル学科出ていますから」と言うんですよ。ホテル学科以外にガイド学科もあって、ガイド学科を出た人は国家試験を受けずとも皆ガイドになれる。国立公園のガイドはまた別の試験を受ける。3年に1回試験をやり直すんです。世の中どんどん変わるからです。受け入れ体制をつくってればこそできるのであって、社会や企業がそれをつくらずに学生を送り込めと言ってもできるわけではないんです。私は学生がすべて観光産業に行くことはなくて、3分の1はいい線だと思っています。

○前田：それは一番根本の問題でね。2000年に入ってからずっと、特にここ10年ぐらい、大学



溝尾 良隆氏（初代観光学科長）

はもっと実践的な教育をしると一般に言う。その話がどうもかみ合わないで消えていくんですね。

今、国立大学の和歌山大学が観光実務教育に関しては一番充実しているようですが、しかし、就職しようとしてもそんなに就職先はない。実習研修は各大学も非常に熱心にやっていますが、受け皿のことを考えると現状の日本ではちょっと無理な話じゃないかなと思っています。

○溝尾：そうですね。だから、受け皿をどうしていくべきか考えることが必要です。先ほどのDMOの問題でも、例えばその一つですが、観光協会が充実しないと無理。観光協会の給与体系がしっかりしていない。私の教え子は観光協会に行きましたが、観光協会は商工会の人みたいに給与がしっかりしていなければ、若い人は観光協会に行きません。しっかりとした給与体系を確立してほしい。コンベンション関係に就職したい学生がいても、そこには出向した人が多くて、あまり新規採用しませんよね。だから、受け入れる側の問題もかなりあるわけね。こんな状態で、大学がカリキュラムをつくり変えればもっと学生が観光産業に就職できるなんて、そんなことはあり得ない。

○前田：コンベンションなどは高度のプロフェッショナルの人たちの知識・技能が必要なので、地方化やコンベンション都市指定をしても、コンベンションの仕事はできません。DMOなどでも、最初はラスベガスが1980年代、地域社会がこのままいったらつぶれるというぎりぎりのところで、大きなリゾートの方向性をどう変えるか考えた。

そして、ファミリー層に来てもらうためにどう変えていくかという、本当に地域全体の将来がかかったようなことを考えることから始まっているのです。日本のように流行り言葉で「DMOの時代だ」といっているのとはわけが違います。

○溝尾：日本版DMOというネーミングも疑問です。「日本版」は要らないでしょう。世界のDMOが「基準」という考えでやらなくてはいけないんです。国が言わなくても地方自治体がやらなくてはならないことなんです。

○前田：日本のはちょっと軽いですね。

○溝尾：思いつきでやってすぐやめてしまうことも問題なんです。

○司会：加えて、私が感じているのは、他業種へ行ってしまう優秀な学生が少なからずいるということです。先生方がご退職されてから、アジアの優秀な留学生を日本に呼ぶ経産省と文科省の事業に関わっていたのですが、非常に優秀なんです。その学生たちは、観光以外の企業も欲しがらるから、給料を比べて観光以外に行ってしまう。

○溝尾：それはそうだよ。

○前田：取られちゃうわな。

○溝尾：JTBでもよそから優秀な学生がくるから、たとえ観光学科で鍛えたとしても、JTBに採用されないこともある。だから、3分の1なんていいところだと思っている。

○前田：社会全体の職業価値観とか、そういう問題までかかわってきていますね。

○司会：むしろ社会が観光学部の学生を欲しがっているとも言えるかもしれません。

○溝尾：前に話した文学部と理学部と法学部、医学部というのは、「文」「理」「医」と一文字の名前の学部です。それは日本の大学の歴史の中で一番古い学部なんです。明治時代にできた学部はみんな一文字。そのあと、「社会」とか「地理」とか二文字になってくる。その後だんだん社会工学とか、文化人類学とかになっていく。文化人類学とかいうと、どっちに重きがあるかという、あとの人類学のほう。地理学というのは、何でも地理学になってしまう。農業地理学、工業地理学、都市地理学。観光学になるとそれは逆。観光地理学、観光社会学。観光が中心の社会観光学となる

とすごいですけどね。

○前田：しかし観光というのは、かつて学術、学問じゃないといわれて、フィールドを重視していた。

○溝尾：ところが今、観光庁は、ある種のハイフンツーリズムというんだけれども、何とかにツーリズムをつければよくなっている。医療ツーリズム、フラワーツーリズム。別にフラワーツーリズムと言わなくても、すでに観光資源分類に植物資源があったわけ。だから、何でもツーリズムをつけていく。それは本来、何とか観光学といっているのに近いのです。

○前田：観光が軽く見られる最大の理由は、自信を持ってないものだから、何とかツーリズムといって大勢でやっているように見せているのですよ。ほとんど意味がないですよ。

(5) 今後の課題と展望

○司会：今後、充実が望まれる点、これからの課題など、お考えの点について前田先生からお願いいたします。

○前田：私からは2つあります。1つは、実はつくるまでにいろいろなことで多くの方にお世話になった、「サテライト白書」のことで。サテライトに対して非常に関心が多くて、これは文部省に対しても非常に説得力がありました。この作成にあたっては、立教観光クラブの会員を対象に調査が行われました。その結果に基づき、なぜサテライトに強い興味を持ち、行きたいと思うかという質問に対して、まず修士学位論文の提出を修了の条件としていることです。要するに、大学院に来て、普通に講義を受けるだけで学位が取れるのではなく修士論文を出せと言われてるのがすごく魅力だといいます。実に、これが進学理由の第1位(92%)でした。これはやっぱり学生というか、勉強しようという社会人の気持ちを表していると思います。

また生涯学習の機会をつくってくれているとのこと。さらに、仕事との両立を図るためにサテライトキャンパスもやっているということもあります。これらを見ると、私は学問をしに来たと

というような喜びを与える意味で、ある程度厳しい授業を皆さんはあこがれているのではないかと思います。

もう一つは、実は困った問題がありました。大学院の開設について、文部省に「立教を卒業した優秀な学生さんを集める大学院をつくることではないですね」と言われました。つまり、文部省が認めるのは、立教に大学院を開設することは全国の観光をもっと勉強したいという人たちを育ててくれるからという、意味があるとのことでした。そのために、必要な努力をしてほしいと。しかし、非常に困っていることがありました。立教の大学院に入学する社会人及び他大学からの人は、どうも観光に関する基礎知識が乏しいということを感じていました。自分の知っている範囲の人は、研究会や何かを通してそういうことを注意したり指導したりしましたが、研究科全体の観光の知識のレベルという点では問題と考えていました。

余談ですが、面白いことがあります。ご存知かと思いますが、一種の大学院に対する第二奨学金的な意味で、留学生の論文作成の際に文章の添削を行うチューター制度がありますね。チューターになった人は、逆に学生を教えるために勉強するんです。そのため、チューターになった人は観光に関する知識が豊かになります。しかし、仕事が忙しいとチューターはもちろんやらない、といったことからチューターを経験しない人の場合は観光に関する知識を広くもつチャンスがないことになります。このような問題に対して、大学院生用の補講を設けるといっても変な話ですけど、社会人や他大学から来た院生たちに観光研究に必要な内容で補講をする仕組みを制度化しなければいけなかったと思います。

○溝尾：ドクターの場合には学生を厳しく絞るけれども修士は甘いという風潮がありますね。

○前田：ありますね。それが問題ですね。最近では本を読まず、インターネットを利用して入手した政府の施策などを、基にして研究している人も少なくないですね。そこで、「あなたはどうか考えたの？」と聞いたら何も考えていないですね。そういう問題があります。

しかし、研究科開設当時は実際にはそれ以上何もできなかったですね。予算もなく、どう人を手配するのかなど多くの課題がありました。実際に社会人を対象にした大学院をつくったといっても、その人たちをある程度鍛えていくような、知識の足りないところを補ってくような仕組みをつくらなければならないと思います。学会発表に行くと、社会人大学院生の発表を聞くと、どうもそれはどこかで見た、どこかで読んだというふうなロジックが多いのです。これが今一番悩んでいることです。現在、立教には外部から大学院生があまり来ていないと思いますが、いかがですか。

○溝尾：特に日本人が少ないでしょう。

○前田：今、大学院の学生はどうでしょうか。

○司会：日本人の学生の場合は内部推薦の制度を作り、以前よりは増えています。

○前田：実は、昔、随分かなりの外国人の学生がいたのに、今はいなくなったのは、国際事情の影響だというふうに単純に答えを出してしまうとしたら、それは大きな間違いだと思います。そうではなくて、今、インターネットをとおして、立教にどんな先生がいて、どんな研究をしているかということがすぐわかります。そのときに、学生たちから見て、立教の先生が魅力のある研究をしておられるかどうかということが問われていると、考えてほしいです。今、昔と違うのは、何先生は何を書いてどこに発表したというのがすぐわかります。そのことの発信力が立教の先生には急速に落ちているということを考えなければと、思っていたきたいのです。これはちょっと改まった形での要望ですね。それを怠って、学生が来ないというような結果だけを取り上げて言っていたのではだめだと思いますね。やっぱり、今は、こうした領域に取り組んでいる先生だということをアピールするというのが一番の基本です。それがちょっと落ちていると思います。大学院をつくったときは、先ほども言いましたように、まだ規制緩和の前で厳しい時代だったので、逆に言うと、まだそれほど情報が広がっていなかった時代でした。しかし、今は全く時代が変わり、どんな難しい本でも、注文すると翌日にはアマゾンから取り寄せられる時代になっています。特に院生を

持つ先生の場合は、インターネットで先生の活動が検索されることを意識してほしいと思います。

○**司会**：社会で活躍する卒業生・修了生も年々増えておりますけれども、20周年ということで、最後に、彼らへのメッセージをお願いします。

○**溝尾**：特に若い人、30代ぐらいの先生方は、大学での仕事が多くて大変だと思うんですね。何かいろいろな仕事が増えてきて、下手すると外の人と交流ができず「たこつぼ」にならざるを得ない。その解決策をどうするかと思い、私は今、2カ月に1回の勉強会を開き、若い先生たちにたまには勉強会へ来てしゃべれと言っています。メンバーの中には社会人になって大学の先生をやっている人や30代でしっかりドクターも取得した先生もいて、互いに交流を図ろうと思ってやっています。しかしながらやっぱり若い人は、忙しくてなかなか参加できない。発表者になると来るけれども、ふた月に1回でも来られない人が多い状況です。だから、若い人たちがうまく研究できる体制をつくれるかなというのを、一番心配していますね。

○**前田**：大学院生へのメッセージとして、大学というのはぶつかり合って論議するところです。そ

の論議をいかにスムーズに上手にやるかということも学ぶというのが大学であり、特に大学院だと思っています。しかし、実際には、今は院生同士が研究したときに、意見がぶつからないように、みんなよけていくという感じが強いです。学会で発表するときにも、むしろ質問されないような発表をしています。だったら、学会へ来る必要はないのではないかとよく言います。

○**溝尾**：学会で発表しましたという業績がほしいわけでしょう。

○**前田**：そうそう。最近、立教の人たちの、若い人たちの学会発表がめっきり少ないですね。それは忙しいとか、いろいろ理由はあるかもしれませんが、やっぱり頑張してほしいと思います。

○**岡本**：卒業生へのメッセージね。せっかく立教を卒業するのであれば、「観光なら立教」というプレステージをぜひ、卒業生諸君も大切にしてほしい。

○**司会**：そろそろ時間ですので、ここまでにさせていただきます。ありがとうございました。

(2018年10月24日 立教大学観光学部にて)